

## 第2回浦安市学校規模適正化基本方針検討委員会 議事録

1 開催日時 令和5年3月23日(木) 14時～15時30分

2 開催場所 庁舎10階協働会議室

### 3 出席者

(委員) 阪本委員長、大和委員、鳩岡委員、堀井委員、板橋委員、知久委員、野崎委員、丸山委員

(事務局等) 教育政策課 宇田川課長、田村係長、武田副主査、奥苑主任主事

### 4 議題

1. 開会

2. 第1回浦安市学校規模適正化基本方針検討委員会議事録の確認について

3. 議事

(1) 第1回検討委員会における確認事項について

(2) 学校規模適正化基本方針改訂の方向性について

4. 諸連絡

5. 閉会

### 5 議事の概要

1. 開会

事務局 : (情報公開についての確認)

只今より、第2回浦安市学校規模適正化基本方針検討委員会を始めます。

2. 第1回浦安市学校規模適正化基本方針検討委員会議事録の確認について

事務局 : 「第1回浦安市学校規模適正化基本方針検討委員会議事録」については、委員の皆様、事前に送付させていただき、ご指摘により一部修正を加えるとともに、すべてのお名前を「委員」とさせていただいて、市のホームページ及び情報公開室で公開しております。

3. 議事

委員長 : では、議事に入ります。前回の議論を踏まえた上での児童生徒の今後の推計について、事務局より説明をお願いします。

事務局 : 第1回の検討委員会で、委員より児童生徒数の減少幅の大きさについて指摘がありました。具体的には「企画政策課の人口推計における0歳から14歳までの数はあまり減少しない一方で、教育政策課の児童及び生徒数推計は減少する見通しであり、それぞれに乖離がみられる」というものでした。企画政策課が今年の2月に人口推計を更新し、推計値が出たので改めて比較したものを資料2の1ページの図1としてお示しします。企画政策課の人口

推計においては、0歳から14歳までの人口推計は2023年からの10年間については、ほぼ横ばいで推移する見通しとなっています。一方で、図2及び図3では教育政策課の市内の小学校に通う児童数、中学校に通う生徒数の実績値及び推計値が、将来、減少傾向であるとみており、それぞれの推計値に乖離がみられます。企画政策課の人口推計は市全体、さらに全年齢について算出したものであり、教育政策課の児童生徒数推計とは対象範囲や年齢が大きく異なること、また教育政策課の推計は学区ごとにみられる出生数の傾向及び未就学児の転出転入などの移動傾向をもとに推計値を毎年算出しており、2022年を中心としたこれまでの10年間の減少の割合から見ると、今後10年間の推計による減少は、ある程度、現実的な範囲の結果であると考えています。

ただし、現在の教育政策課の児童生徒数推計には課題があります。一つは0歳児の出生数把握が難しいということです。将来の出生数についてはその学区の過去5年の0歳児の平均値を採用していますが、この方法だと20年を超えるような長期の推計では出生数、またそれをベースにした児童生徒数の推計値が一定の値に収束してしまいます。

そこで、企画政策課の浦安市の将来人口推計を参考にして学区内の出生の動向を把握していきたいと考えています。

次に、児童生徒数の大幅な増減です。一般的な傾向として、小中学校に入学した児童生徒は未就学児に比べて住居の移動が少なくなる傾向にあり、学校の学年全体の数が大きく増減することはありません。しかし、その学区内に新たな宅地開発の計画が生じたり、大規模集合住宅が建設されたりした場合、児童生徒数に影響のある0歳から14歳の年齢の人口が、以後、数年間にわたり大きく増加することになります。これは推計時点ではわからないものもあるため、50戸を超える集合住宅の建設予定を都市計画課から、随時、情報提供していただいています。また、市全体のまちづくりや宅地開発の計画についての情報共有をする等して企画政策課や都市政策部、都市整備部などと連携していく必要があると考えています。

なお、第1回の検討委員会の際に、私立の学校に進学している状況はどうかということが話題に上がりました。それにつきましては、小学生については、例年約98%の児童が市内の公立小学校に通っております。中学校については、例年約2割が私立の中学校へ通っている状況です。

委員長 : 今の点は、前回議論した中で、重要な部分で、推計は浦安で大規模校への対応は進んでいますが、小規模校については、状況はさらに厳しくなるという予測が第1回目で示されました。その要因は、学校へ行く児童生徒の数がそもそも減っているのか、よそに流れているのか、よそへ流れるとすれば、浦安市にあるか他市にあるかは別として、私立へ流れるということになります。今の説明から、小学校ではほとんどは流れないということなので、そもそも出生数や子供の人口が減っているということとなり、これまでもそうなっ

ていたということがはっきりしている。今後、減っていくかどうかは分からないのですが、過去の状況を見ると減っていくのではないかというのが、教育政策課の意見です。

一方で、企画政策課の推計は減らない。推計の違いはあるにしても問題があるのかないのかがはっきりしないという大きな問題となっているのですが、どうでしょうか。

委員：市内全域のグラフとして出されているのですが、地区ごとになると子供の増減が違ってくると思います。特に中町地域の住宅地等は高齢化が進んでいる中で、子供は減っている状況だと思います。一方、富士見地区においては、既存の木造住宅のアパートを取り壊し、新しいアパートやマンションができるなど、開発が循環していく中では、地区によっては子供が増えている状況があります。企画政策課の人口推計の考え方も過去の開発状況も見ながら、今後の開発状況がどうなっていくかを考えています。それと、女性が、今後、子供を何人産むのかということの予測を、浦安の統計の状況を見ながら、出してきたものです。

今後、開発がほぼない状況となってくるので、若干減ってきているが、人口推計の出し方は、非常にぶれがあるのは確かです。それぞれに考え方のポイントが異なるので、出し方によって変わってくるのが現状だと思っています。

委員長：これは、市全体のグラフですけれども、確かに地域によって違って、おそらく中町や新町は、元町に比べて、かなり厳しい状況にあります。第1回でもそれを前提に考えていますが、それにしてもトータルで減ったり、変わらないとなっていたりするのはどうなのかということは問題としては残ります。出生率や適齢期の女性が何人子供を産むのかもわかりませんし、韓国のように日本よりも少子化の深刻な国もあれば、フランスのようにかなり頑張ってきた国もあり、様々です。ですからそれは国全体、あるいは浦安市全体の話とも言えます。

しかし、それにしても、どちらを前提にして問題を組み立てるかで随分変わってきます。トータルでは減らないが、地域別ではこんなことがあるということとするのか、これが一つ検討課題です。今ここでどちらが正しいのかという議論をしても仕方ないので、もう少し事務局を中心に推計の在り方について、そういうことも考えられると納得できる資料に修正していく必要があるかと思っています。

推計は地域別に出しているのですか。

委員：地域別に出しています。

委員長：企画が出すということは、市が出しているようなものですが、しかし、推計ですから、しかも、これはどの市町村も経験したことなのですが、推計を出すと、特に開発系の意欲のある方が、こんな政策を打っているのだから将来はもっと人口は増えるはずだということで、将来人口を推計してみたら、日本全体でものすごい数になってしまったという経緯があります。確かに、

政策次第で人口は変わりますが、そこは、問題としてはどうなのだろうかということを考えていただきたいです。

それから、最近、経済成長の話の中でよく出てくるのは、幅を持たせた推計で、例えば出生数が伸びた場合のようなものも必要になるか、単純に将来はこの人数だと決め切るのは難しいと思うので、もう少し推計の仕方を考える必要があります。

委員：企画の人口推計の中で、一つのポイントとして、今後大きな開発はないことは加味しています。ただ、元町地域では、建て替えによる開発が、今も進んでいます。特に、元町地域における開発は、まだまだ繰り返していただくという想定を、この人口推計の中には、加味しています。将来の施策等については、これを入れてしまうと人口推計がいろいろな形になってしまうので、加味していません。

委員：教育政策課の推計については、例えば令和3年度の0歳児が、令和6年度3歳児になっているところを見たときに、0歳から1歳、1歳から2歳、2歳から3歳になったときに、どのくらい増減があるかという移動率を出し、その移動率を乗じて推計しているもので、平均してこのくらい移動するということを加味していて、学校に行く年齢になったときに、やはり少しずつ減っているということから、このような推計を出しています。

委員長：昔の市町村の人口推計には、トレンド推計というものがありました。願望推計とも言って、トレンド推計だと、過去にこうだからこういうふう伸びるでしょう、しかし、そこでは理由はわからない。人口推計はもう少し進んできて、コーホート型の推計となり、同じようなことをやられているのではないかと思います。特に大事なものは、大規模校が元町の方で出てきて、人口の動態も非常に早いものがあるって、低層の住宅が多かったものが高層化していく。その中で人口も増えるでしょう。中町新町の方は既に良い住宅地として出来上がって、しかし、これが建て替えるのはなかなか難しいという状況なので、元町の方は増えていくけれども、中町、新町の方はこれからも減っていくでしょう。地域別の議論というのは大変重要になります。それから、私立中学校へ2割の生徒が通っていることは、中学校の方に大きく影響している数です。この2割の子供が行くことは、自由な判断であるし、また、特に私立学校は中学校からが多いですから、別に問題があるということではないですけれども、本当は浦安の公立の中学校がさらに魅力を出していくという路線も在り得るかなとも思いますが、これは推計の話とは違います。人口推計の現状について、他にご意見ありますか。

委員：事務局からの説明では、過去5年の出生率の平均で推計しているので、どうしても減ってきているという話がありました。図1の方を見ると、10年前25,967人が20,890人と2割くらい、子供が減っていて、一方、図2の方になると、実績値として、やはり減る傾向で、2割前後で減っています。一方、図1の推計値を見ると、ほぼ横ばいというトレンドですから、おそらく図

2の方の児童の推計も、ここまでは落ちないのではないかと思いますので、先ほど事務局からあったように、新しい予測が出た段階で、推計すれば同じような傾向に近づいてくるのかなと思います。

委員長 : 大規模校問題はまだ残っているかもしれないです。元町の方で人口がさらに増えるということになると、元町の方で大規模校対策をしても、まだまだ足りないのかもしれないので、推計の確認をお願いします。

2つ目の点について、報告をお願いします。

事務局 : 資料3をご覧ください。他市の規模適正化への取組の状況についてまとめました。学齡児の推計について、ほとんどの市で減少するという傾向でとらえておりますが、船橋市は横ばいとしておりました。また、八千代市については、地域で増減の差が非常に大きいということでした。小規模校対策について、特徴的だったのは、市川市、八千代市、千葉市で義務教育学校や小中一貫型小・中学校の設置を対策の手法として加えており、市川市と八千代市では、実際に設置されている事例があります。江戸川区については、積極的に統廃合が進められています。

委員長 : 千葉県内の他市の状況のほかに、江戸川区を含めて比較していることは、重要で、概して減少傾向だということですが、八千代市は平成20年から変えていないということですか。

事務局 : 八千代市については、地域で増減の差が非常に大きいことから、地区ごとに個別に検討を進めているということでした。

委員長 : 義務教育学校は、小・中学校の組織を1つにするということだそうです。千葉市に記載のある小中一貫教育校は、組織は別で、教育体系を一体として考えるとこういうことで、校長先生の数が1人か2人かという違いにもなるかと思います。

しかし、一般論として言うと、小規模校対策の手法はどこも似ていて、通学区域を変更したり弾力化したり、そして統合も考えます。統合は、結構、大ごとで、そう簡単にできることではなく、変な言い方をすると痛みを伴うものでもあるので、その統合に至るにしても色々なことを試みた上で、統合やむなしとなれば、その場合も統合に当たって色々なことが検討されるということだろうと思います。

備考欄については、方針策定後のことですか。

事務局 : 最近の主な適正化に係る内容をまとめたものです。

委員長 : わかりました。こういうことで最近でも、結構、統合が進んでいるという印象を受けました。

それでは、2番目の議題である。適正化基本方針改定の方向性について事務局よりお願いします。

事務局 : 資料4になります。現在の方針を上の方角で囲っております。その中で小規模校が増加傾向であるということで、現在の方針の中には、学校の統合、通学区域の変更、小規模学校選択制も実施していて、効果も一定程度あるものの、

十分な対策としての選択肢が限られている状況です。大規模化への対策は進んでいますが、小規模化への対策については、小規模校が増えつつある現状から、新たな対策や手法が必要であると考えます。

小規模校においては、児童生徒一人一人に教職員の目が届きやすく、きめ細かな指導ができることや、学校運営面で共通理解を図りやすく一貫性をもった指導ができることなどのメリットがあるものの、小規模化によって生じる交友関係の限定化や多様なものの見方や考え方に触れる機会の減少、配置される教職員数の減少による教育活動への制約の懸念等、教育指導面・学校運営面でのデメリットもあります。

大規模校、小規模校にかかわらず、市内の小中学校は、学校規模、児童生徒の実態、学校施設、地域の特色など様々な要因により、それぞれの学校の特色を生かして学校運営が展開されています。学校規模の適正化について考える際にも、学校及び地域の現状や特色に合わせて検討することが重要であると考えます。

そこで、小規模校対策がより幅広い選択肢のもと、学校や地域の現状や特色に合った形で検討されるように、小規模校の良さを生かしつつ、デメリットを解消することができるような手法について検討し、改訂の際に加えたいと考えております。具体的には、第1回の検討委員会でも話題に上がっており、また、他市においても設置の例がある、小中一貫型小・中学校や義務教育学校化が挙げられます。小規模校の良さを生かして、デメリットを解消することができる可能性がある手法の一つになってくると考えております。

その他、改訂の際に検討する内容の例として、推計を含めた市全体のまちづくりの視点、認定こども園、幼稚園、保育園との連携の視点、児童育成クラブ及び放課後子ども教室等の学校施設活用の視点等が考えられます。

それら様々な視点から、市内公立小中学校の在り方について基本方針について見直すことができるように、来年度も引き続き検討し、基本方針の改訂を行ってまいりたいと考えております。

委員長 : 小規模校が発生すると統合というのも当然考えられるけれども、しかしなお、小規模校対策を一生懸命やってそれなりの魅力化にこういうことが必要ではないかということです。

中学校と小学校の先生に聞きたいのですが、小規模校にもっといろいろな魅力をつけるということですが、ご意見いただきたいと思います。

委員 : 本校は、コミュニティ・スクール化して、より地域に密着した学校の取組を今年度から始めています。浦安型コミュニティ・スクールという形で、学校のことを知っていただいた上で、地域総ぐるみで、学校の魅力を何か発信できればと思っているところです。

もちろん小学校から中学校に上がる時中学校受験をして私立の学校に行ってしまう生徒も一定数の割合でいますが、公立中学校で学力の面もカバーできるような学校づくりも考えていくと、進学のとときに公立中学校を選ぶこと

にもつながるのかなと思います。

委員長 : 言葉の用語の使い方で、例えば、コミュニティカレッジという言い方には、二つ意味があって、一つは地域で作った大学、もう一つは市民大学で一旦働き方を終えた人たちのための大学があって、コミュニティという言い方には色々な意味を持ちます。

今のコミュニティ・スクールはもう少し具体的にはどういうことですか。

委員 : 地域の人材を集めて、地域が学校にできることや学校単体ではできないような活動をやっていたり、逆に学校が地域に還元したりすること、中学生が地域にできることを行い、地域との結びつきを深めるような仕組みです。

委員長 : 地域の力を使って子供たちに、ある種の教育支援を与えるっていう側面と、むしろ地域に出て行って、そこの子供たちが地域と関わりを積極的に持つようにするということです。浦安型コミュニティ・スクールは、実際にいつ頃できるのですか。

委員 : 基本的にコミュニティ・スクールは、努力義務でいずれどの学校もやることになると思いますけども、隣の市川市は全部コミュニティ・スクール化しています。浦安は本校が中学校では先にモデルという形でやらせていただいています。

委員長 : すると住宅と割合近いところであるというのは結構大事な要素になります。小学校はいかがでしょうか。

委員 : 小規模の良いところということで考えたときに、浦安の場合は、幼稚園、それから小学校、中学校が割とすぐ近くにそれぞれ隣接しているというところがあります。その中で、小規模だからこそ、逆に言うと幼保小中連携というところの機動力はあると思います。例えば、小学校1年生が幼稚園と連携する際に、6クラスある学校では6クラス分の動きを取らなければいけないわけですけども、本校の場合、2クラスですので、幼稚園とまた保育園と一緒に活動するということは、行事の日程の調整もしやすいですし、動きやすくなります。これは、中学校との連携の際も同じです。そういう意味の小学校の中の縦串ではなく、幼保小中連携という中の縦串としては機動力が取りやすくなっているのが、浦安の一つ大きな特徴と思っているところです。別件で質問ですけども、浦安市は小規模学校選択制というのは一つ大きな特徴だと思うのですが、資料3の中で、浦安市の小規模学校選択制は、通学区の弾力的運用に含まれているという解釈でしょうか。

事務局 : 通学区の弾力的運用の中に小規模学校選択制度ということで現在の方針に入っています。

委員 : そこを踏まえてですが、資料4の小規模校の増加による対策についてという項目の一番下で、小規模校対策がより幅広い選択肢と書かれていて、当然これをこれから検討するわけですが、より幅広い選択肢がこれ以上出るといところが、この資料3の他市の状況を見たときでも、なかなか新たなものは、今の段階で難しい気もするのですが、何か見通しはあるのでしょうか。

- 事務局 : 幅広い選択肢というのは、今の方針の中に小中一貫型小・中学校や義務教育学校を検討することを選択肢として加えるというのが一つの幅を広げることと考え、記載しております。
- 事務局 : 現行の基本方針の中にも学校の統合や通学区域の変更という手法は踏襲しつつ、さらに視点を変えて、小中一貫型小・中学校や義務教育学校のような手法も一つとして考えられるということで、説明させていただいております。
- 委員 : ありがとうございます。
- 委員長 : 今ご意見いただいた中で、小規模校は、連携するのに融通がきいて良いという話です。なるほどと私も思うのですが。連携はどういう中身が良いのかを一つ考えただけでも、幅広い可能性はありそうです。どんな連携が考えられるのでしょうか。
- 委員 : 今やっている連携は、例えば小学校1年生は、小学校の中で一番下ですが、幼稚園の子と連携をとるとお兄さんお姉さんの立場となるので、いろいろな立場を経験できる。小学校6年生が中学校1年生のところに行くと、小学校で最高学年ですが、こんなふうにはやらなければいけないのだと、自分たちの足りないところもまた見えてくる。また、将来がこうなっていくという見通しが持てるところは利点になるのではないかと思います。
- 委員長 : ということは、同じ場所で利用者がいるという場所を作らないといけないということになりますね。例えば、幼稚園と小学生たちが一緒に遊ぶという場はあるのでしょうか。
- 委員 : はい、今、やっていますね。遊んだり、教え合ったりしています。
- 委員 : 基本的な交流を今やっています。幼稚園の意識からすると、1年生になってスムーズに学校に進学できるかが、重要であって、幼稚園の年長の段階から学校と交流していくことが大切です。浦安市の特徴として、小学校と幼稚園は近くに設置されているところが多いことです。それ以外では今は、小・保の連携も必要ですので、保育園全体も含めて、交流をしながら、また、さらに先生方への研修も次のステップへ進められたら、さらに良いのではないかと思います。
- 委員長 : 確かに、小規模校だとそういうことが行いやすいということですね。ありがとうございます。確かに、子供の立場によってずいぶん変化します。自分はおがまを言っている世代だということと、自分がお兄ちゃんだから頑張らなければという、人間には大体両面があるはずですが、そのときは片方だけで生きているようなところがあって、これがスムーズな移行に難しい問題を出している面もあるかもしれません。ありがとうございます。
- 委員長 : 市全体でまちづくりの視点から少し前は話が出たと思うのですが、他の委員の方から、お願いします。
- 委員 : 資料3ですけども、各自治体でこういう対策をして、どういう効果があったのか、なかったのか。例えば、市川市では小規模校対策で、小中一貫校を設置して効果があったということですが、逆に他の市では違うということもあ

るのではないかということも考えられると思います。この資料をもう少し深掘りしないとこの先の議論は深まっていけないのではないかと思います。議論を聞いていた中で、小規模の学校の良いこともあるという話を伺って確かにそうだなと思ったのですが、学校規模の適正化の基本的な考え方をどうするのかというところでは、大規模校対策、小規模校対策ということで、それをどうにかこの適正の中に収めたいというところの視点からは、少しずれているような気がしています。施策のメリット、デメリットがピンときませんので、そういう情報をいただけるともう少し違う視点から意見が言えるのかなと思ったのでその辺を次回までにお願ひできればと思います。

委員長 : ありがとうございます。今の視点から、二つのことがありました。他市がやっている、例えば一貫校や義務教育学校はメリット、デメリットがあるかもしれないので、そこら辺が現実によく運用されているのかということ。それからもう一つは、学校規模適正化という観点から、浦安は小規模校でもいいという考え方に行くのか。あるいは小規模校の数値を変えるのかということにもなり、大きな視点として残ります。

事務局 : 市川市の義務教育学校の設置に関する方針には、塩浜学園を先行して設置して運営していく中での成果と課題がまとめられています。ここでは、多くの保護者、教職員が、小中一貫教育は、児童生徒の成長にとって効果があると捉えており、中学進学時に不登校や生徒指導上の諸問題につながる「中一ギャップ」の緩和や学力向上、自己肯定感の高まりなど、多方面で高い効果が見られています。また、教職員についても子供の発達に対する理解が深まることや、児童生徒の理解の深化につながることなど指導上の効果も明らかになっています。一方で、学校文化の異なる小中学校間の調整等に多くの時間を要している状況があり、教職員の多くが学校運営に当たっては課題もあると捉えているとあります。

事務局としては、これらの学校の設置を考える際には、教育的効果、学校の施設の状態や規模、それから通学区域等が地域の実情に合っているのかどうか、慎重な判断が求められますので、この規模適正とは別に義務教育学校や小中一貫教育のことについて具体的な考え方を丁寧に検討する必要があると考えております。

委員長 : 義務教育学校化することによって小規模学校対策になるのかどうかという観点は、分かりにくいですね。

事務局 : 義務教育学校化については、施設を一体で運用したり、施設隣接型といって小と中が隣合わせにある形や、あるいは地区の中で施設分離型で運用したりする等の類型があり、それぞれメリット・デメリットがあると思います。ご指摘がありましたように、事務局のほうでもわかりやすい資料の作り方をしていきます。

委員長 : 小規模校対策の手法として、この議論が前回に出てきたのがなぜかという、統廃合をした場合、地元の方々が単なる統合で学校がなくなるのでは困ると

いう議論が当然出てきますけれども、これは単なる統合ではなく、新しい教育サービスを提供するのだと、そのためにこのように統合する必要があるという観点から議論が出たと思います。ですから、それは小規模校対策でいうと学校統合に近いようなものだと思いますので、今、話があったように義務教育学校を設置することは、併せて調べていただきたいと思いました。

委員：今年度、義務教育学校の塩浜学園と阿蘇米本学園を視察に行きました。塩浜学園では以前は、学区を少し弾力的に運用して、他の地区からも来られるようにする政策をとっていたのですが、そこにも限界があり、なかなか思うように児童生徒数が増えていかないという現状がありました。また、地域として児童数が増えることが将来的に見込まれないということがあって、小さな小学校だけ中学校だけというよりも、人との繋がりをもう少し幅広くして、学校の規模を義務教育学校という大きな規模にして運営すると小規模の学校のデメリットが解消されるのではないかとということで、1小1中を合体して義務教育学校にしたものでした。

委員長：同学年が増えるというよりも、縦の人間が増えてくということですね。

委員：阿蘇米本学園は、少し異なって、ここは子供の人数が増えるっていう見込みがあまり見込まれないことから、1つの中学校と3つの小学校が1つの義務教育学校として誕生したっていう経緯があります。そうすると先ほどの1小1中とは違って、小学校の横の広がりが出たので、児童生徒の児童の人数が増えた中で中学校との一体化だったので、人間関係は非常に今までよりも広い人間関係が構築できて、教育活動の中でも今まで小さくてできなかったことが、大きくなったことで、できるようになったという教育効果があると感じました。非常に学校自体も活気があって教育環境としてはすごく良くなったのかなと感じます。

委員長：第1回のときに校長先生方から小規模校は頑張っている。ただし、生徒間で多様な付き合いが生まれるかという面では、少し難しいところがあるという話があって、やはり場合によっては統廃合もやむを得ないのかなと感じましたが、統廃合には様々な形があるということを感じました。

委員：質問として、小規模校はそのデメリットを何とか解消してっていう話で、何がデメリットなのかというと、交友関係の限定化あるいは多様なもの見方考え方に触れる機会が減少するということで、様々な連携を進めていこうということですが、そもそも近くの小学校との交流を増やしていこうという考え方は現状であるのでしょうか。学校間交流のような感じで、それで近くの学校同士であれば、そういう交流を増やしていくことで、またそれが統合への難しさというのを少し緩和するみたいなのところもあるかもしれませんし、統合で解決しない間に何かしなければならぬということもあるので、そういう交流のようなことをやられているのでしょうか。

事務局：本市では、現在、園小中連携・一貫教育によりまして、先ほどから出ている園小中の連携の中での交流は、確実に進んでいるのではないかと考えており

ます。

委員 : 交流を一定数行っておりますが、日常的な交流というところでは行き来する時間がかかってしまったり、準備の必要があったりするということもあり、日常的にはまだ少し、厳しいところがあると感じます。

委員 : 自分の小さい頃、隣の小学校の子と塾が一緒になって友達になって、コミュニティが広がったということもあったので、週に何日かでもそういう活動があれば友達になったりもするのかなと思います。

委員長 : ここで使われている交流はどんな交流を指しているのか、具体的に書く必要があると思います。ただ交流が増えますでは意味がはっきりしない部分があります。

委員 : やはり学校規模適正化という言葉と今の議論について違和感があります。規模が適正ではない中でどうしようかということで、交流をするということと、適正化は小規模校を最終的には統合せざるを得ないということと、何人が適正なのかという幅の話なのか、教育をどうするのかという話なのか、少しずれているような気がしてならないので、その整理をした方が良いのではないかと感じます。

事務局 : これまで適正学校規模適正化の基本方針という名称ですが、今後、適正な規模だけでなく、適正な配置という視点も併せて盛り込んでいければと考えております。

委員 : 今、配置と言われましたけど、基本的には建物は同じであって、配置というところと何か変えるのという誤解を呼び込んでしまうので、そこも整理された方が良いのではないかという気がします。

委員長 : 実際、現行の基本方針の報告書でも、大規模校、小規模校をなるべく解消するというところで、いくつかの対策が行われていて、さらにそれが進行する小規模校に関して進行し状況は厳しくなるだろうということですが、現行の基本方針の報告書の中では、小規模校については、直ちにとという書き方にはなっていないです。要するに、小規模校なりの努力さえできるのであれば、小規模校の期間をもう少し長く持ってもいいかもしれないというニュアンスが少しあるように感じます。ただ、やはり基本的な方針としてはどうかということとは定めなくてはならなくて、その間のつなぎをどうしていくかということと整理した方が良いのではないかと思います。

委員 : なかなか難しく、本当に子供たちが少なくなれば、統合となっていくのはしょうがないのかなと思っています。ただ、その統合したときに、そこに廃校という形になる校舎をどう使うかということもあります。今、旧入船北校舎は、いちよう学級や市民大学という用途として使っています。統廃合となった校舎が今後、どう活用できるか、また、開発状況によっては、再び子供の数が増えて、元に戻るのではないかということも考えているので、校舎を壊してしまうと、再び建て直さなければならなくなります。統合したときには、校舎はそのままにして、壊すことは厳しいのかなとも考えています。

委員長 : 江東区はかつて、東京都の特に都心人口が減った時期に、小学校を減らしました。その後、都心回帰で小学校が足りなくなって困ってしまったということがあります。だからそのようなことに対する、弾力性を持つことも市としては大事であろうということになります。ただし、財政の方でそれを許してくれるかということは、別の話だろうと思います。

委員 : 現在、学校と同様に、特に、幼稚園認定こども園についても園児数の減少が続いています。その要因は出生数や少子化というよりは、ニーズが、保育所に傾いているところがあります。そのあり方の検討や保育所の待機児検討を行っていますけども、来年度、正に統廃合も含めて、同じような検討、これから考えていくということでは、学校の方が今後適正化の中で統廃合を含めて考えた場合、特に幼稚園は関わりがあるところですので、密な連携も必ず必要になってきます。

もう一つ、児童育成クラブと放課後こども教室の方ですが、こちらは逆に、ニーズが増えています。毎年利用者の増加傾向もあって、国の方でも今、子育て施策として児童育成クラブの基準枠を緩和するような話も出始めています。そうすると、今後、より一層増えてくると、施設の増設という話もあると同様に、今、既存の学校の一部を借りるということも、既に何校かについては相談、調整しています。この学校規模適正化の中では、その調整も踏まえてご検討いただけるように、お願いしたいと思います。

委員長 : 今の意見は、施設の有効活用の話とそれから弾力性の話です。確かに学校のような大きな土地は確保するのが極めて困難です。建物はいつかは老朽化して建て替えるということはあるのですが、土地を確保することは難しいです。最近の学校は、マンションの中に学校があるのかという感じのものがあったり、色々な社会教育系の施設が入っていたりして、建物の活用に関する議論も結果として出てきます。

ただし、これも次の話題なのかなと思いますので、最初にはやはり、適正化はどうするのかという基本的な考え方を示した上で、それを現実に適用するときはどういうことを考えなければならないのかという順番で考えるのが妥当だと思います。

今日のところは、当初事務局で用意した議事に関しては、終わりにしますが、各部門でいろいろな知見をお持ちでしょうから、事務局の方に何かありましたら情報を伝えていただきたいと思います。

#### 4. 諸連絡

事務局 : 引き続き議論が必要であるという判断のもと、次年度も検討委員会を継続して実施することを確認した。

#### 5. 閉会